

0歳児保育における保育者－子ども関係

杉山 弘子*・佐藤由美子*・前田 有秀**

Nursery Teacher - Child Relationship in Day Care for a First Year of Life

Hiroko Sugiyama・Yumiko Sato・Tomohide Maeda

本研究の目的は、0歳児保育の蓄積のある保育園の園長及び担任を対象に面接調査を行い、0歳児にとって安心のよりどころとなる保育者との関係を築くための保育のあり方を考察することである。予め調査票を送付し、面接では保育者と子どもの関係づくりについての考え方や4月から7月までの保育の実際について聞き取りを行った。結果から以下の考察がなされた。子どもの要求に応えながら信頼関係を築いていくためには、少人数の集団編成と3対1の基準を超える保育者の配置が求められる。子どもの姿に応じて柔軟に保育体制を調整していくことが、安心のよりどころとなる関係を築いていく上で重要である。一人ひとりの子どもを理解し、要求に応える上で、職員間の連携は欠かせない。保育者と子どもの関係づくりにおいては、生活場面での子どもの要求を満たすとともに、保育者が一緒に繰り返し遊ぶこと、また、0歳児と気持ちをやりとりするプロセスが大事である。

キーワード：0歳児保育、担当制、安心のよりどころ、子どもの要求

問 題

0歳児クラスの保育者は、子どもにとって安心のよりどころとなりながら、「よく寝、よく食べ（飲み）、よく遊ぶ」生活づくりを進める。子どもの生理的要求を満たし、心地よく過ごせるように世話をするとともに、遊びの楽しさに共感しながら、子どもが周りの世界との関わりを広げていけるよう働きかける。本研究では、心地よい生活と楽しい遊びの基盤となる保育者と子どもの関係づくりについて考えていく。

まず、乳児期の大人との関係の発達を概観する。

神田（2006）によれば、乳児は、3か月をすぎるところから、やりとりの相手としての大人に注目するようになる。5～6か月ころから、親しくコミュニケーションしてきた大人、自分の要求に敏感な人を識別するようになり、人見知りが始まる。0歳後半から1歳前半の時期には、特定の親しい人への愛着がますます強まる。この時期の子どもにとって、母親（親しい人）は心理的な安定のよりどころであり、経験の共有者（何かができる、何かを見つけた、という喜びを伝え、共感しあう相手）としての意味をもつ。

また、保育所保育指針＜平成20年告示＞（厚生労働省，2008）によれば、おおむね6か月

2014年9月10日受理
* 尚綱学院大学 教授
** 尚綱学院大学 准教授

未満では、「泣く、笑うなどの表情の変化や体の動き、喃語などで自分の欲求を表現し、これに応答的に関わる特定の大人との間に情緒的な絆が形成される」。そして、おおむね6か月から1歳3か月未満では、「特定の大人との応答的な関わりにより、情緒的な絆が深まり、あやしてもらおうと喜ぶなどやりとりが盛んになる一方で、人見知りをするようになる」。

以上のことから、0歳児クラスには、養育者への愛着の形成期にある子どもや、養育者への愛着が強まる一方、人見知りも見られるようになる時期の子どもが入園してくることになる。保育所保育指針<平成20年告示>では、乳児保育に関わる配慮事項として、「一人一人の子どもの生育歴の違いに留意しつつ、欲求を適切に満たし、特定の保育士が応答的に関わるように努めること」があげられている。それによって保育士への愛着の形成を図ろうとしているものと考えられる。

複数の子どもを複数の保育士が担任することの多い0歳児クラスにあって、一人ひとりの子どもについて担当する保育士を決めて保育をする担当制を敷くことは、子どもと保育士との愛着関係を築く上で重要であると言われる(汐見・小西・榊原, 2007)。橋田・佐藤(2006)は、実践を通して、担当制保育では愛着関係が早期に形成されることが確認されたと報告している。

しかし、担当制を敷いたとしても、特定の子どもを特定の保育士が常時一対一で保育するわけではない。児童福祉施設の設備及び運営に関する基準では、保育士の数は、乳児おおむね3人につき1人以上、満1歳以上満3歳に満たない幼児おおむね6人につき1人以上である。多くの場合、1人の保育士は複数の子どもの担当となる。また、勤務時間等の関係から担当が不在の場合には他の保育士が保育にあたる。

このように複数の子どもを複数の保育士で保育する集団生活の場において、一人ひとりの子どもにとって安心のよりどころとなる保育者との関係を築いていく上で大切にしたいことは何であろうか。本研究では、乳児保育の蓄積のある保育園を対象に、0歳児保育における保育者と子どもの関係づくりについて園として大事にしていること、及び、関係づくりの実際について聞き取り調査を行うことを通じて、この問題を検討したいと考える。

聞き取りのポイントの1つに、0歳児クラスの編成があげられる。生活集団の大きさや子どもと保育者の人数比などの保育条件は、保育者と子どもの関係の質に影響すると言われる(大宮, 2006)。アメリカ小児科学会とアメリカ公衆衛生協会によって推奨されている保育ガイドラインによれば、6ヵ月から1歳半までの子どもでは1グループ6人までとされている(日本子ども学会, 2009)。この基準に従えば、0歳児保育のクラスあるいはグループの大きさは6人以下が望ましいことになる。また、保育者の配置は、児童福祉施設の設備及び運営に関する基準では乳児おおむね3人につき1人以上であるが、1人の大人がみる子どもの数が少ない方がよりよい関係づくりが可能になると考えられる。クラス担任の他に、職員が手伝いに入る体制をとっている場合もある(佐藤, 2009)。このような応援体制があるのかどうかについてもとらえておく必要がある。

2つ目のポイントに、子どもをみていくための具体的な体制があげられる。担当制をとっているか、とっているとすればどのような担当制か、担当制をとっていないとすればどのような体制をとっているか等である。今井(2006)は「0歳児12人を4人で誰ということなくみるより、生活習慣に関わる育児(養護)の部分で、ひとりの保育者が3人みるほうが心をこめ、ていねいに関わることができる」(p.159)と述べる。また、継続して関わることで個々の子どもを理解し、ゆとりをもって保育できるようになるため、子どもも安心し信頼関係がしっかり

築かれると言う。しかし、保育者を固定すると、その保育者の見方だけで子どもや保護者を見てしまう危険性もあるとし、複数の保育者が少人数の子どもを担当する「ゆるやかな少人数のグループ担当制保育」(p.160)を提起している。実践記録としては、0歳児クラスの子どもを3人ずつに分けて担当を決める例(大沢, 1994; 佐藤, 2009)もあれば、0歳児10人を高月齢児5人と中低月齢児5人の2グループに分け、担当が2人ずつに分かれて担当した例(坪田, 2012)もある。このように、担当制といっても多様なやり方がありうるし、特定の子どもについてだけ担当を決める場合もあるであろう。いずれにしても、一人ひとりの子どもを理解し、ていねいに関わりながら信頼関係を築いていくための保育体制の実際を知ることは重要と考えられる。

3つ目のポイントに、保育者間の連携があげられる。どのような体制をとるにせよ、複数の子どもを複数の保育者で保育するという条件の中で、一人ひとりの子どもを理解し、一人ひとりの子どもの要求に応え、大人との一対一を保障する上で、保育者間の連携は欠かせない。倉繁(2005)は0歳児クラスの実践記録の中で、心地よく眠ることの難しいA君が眠るために「一番大切なのは安心して身を任せられるようになることだと担任同士再確認」したことや、生活の場面ではA君が愛着を示す保育者が意識的に関わり、他の担任は遊びの中でなかよくなっていこうとしたことを報告している。子ども理解を共通にし、特定の保育者との安心できる関係を確かなものとするとともに安心できる関係を広げていくための連携の例と言えよう。

4つ目のポイントとして、実際に0歳児を担当している保育者とその指導・支援にあたる園長に、保育者と子どもの関係づくりにおいて大事にしていることを尋ねる。高木・萩原(2012)は、「保育者が安心できる人になっていない」と思われるYくんについて、まずは生理的要求を満たすことができるようにし、遊びで共感することを大切にしていこうと考え実践することで、保育者との信頼関係ができていったことを報告している。このように、生活や遊びの場面で日常的に展開される関わりの基本においているものをとらえたいと考えた。

その他、保育環境や保護者との連携も保育者と子どもの関係づくりに影響を及ぼすと考えられることから、聞き取りの項目とする。

以上の通り、0歳児保育の経験を蓄積してきている保育園の園長及び担任の保育者を対象に、入園当初の保育についての面接調査を行うことにより、0歳児にとって安心のよりどころとなる保育者との関係を築くための保育のあり方を考察することが本研究の目的である。

方 法

1. 対象

面接の対象は0歳児保育を開始して40年以上になるA保育園とB保育園の園長及び0歳児クラスの担任(リーダー的保育士)である。A保育園は0歳児クラスが1クラスのため、保育士1名、B保育園は2クラスのため、保育士2名が対象となった。

2. 日時と場所

面接日は2014年7月上旬に設定された。時間は各保育園、1時間半程度である。場所は、各保育園の一室である。

3. 手続き

事前に調査票を郵送し、調査項目の一部については予め記入してもらうか、資料を添付してもらうこと、他の項目については面接時に回答してもらうことを依頼する。園長については著者3名が、クラス担任については著者の内2名が面接を行う。回答については、その場でメモをとるとともに、録音し、事後に再生して記録を作成する。

4. 調査項目

調査項目を表1に示した。クラス担任への面接では、以下のように、より具体的項目をあげて尋ねている。

保育体制について

- (1) 生活集団の規模
- (2) 担当制
- (3) 応援体制
- (4) 4月から現在までの保育体制で良かった点と課題

保育環境について

- (1) 遊ぶ場の環境づくりで良かった点と課題
- (2) 生活の場の環境づくりで良かった点と課題

保育者間の連携について

- (1) 一人ひとりの子ども理解のために
- (2) 一人ひとりの要求に応えるために
- (3) 大人との一対一を保障するために

表1 調査項目

対象	事前記入項目	面接時の項目
園長	<ul style="list-style-type: none"> ・園の開設年月 ・園の保育方針・保育目標など ・保育時間 ・定員と在籍数 ・クラス編成 ・職員構成 ・0歳児保育の開始年度と開始理由 ・保育課程にあげている0歳児保育の目標 ・入園可能年齢 ・0歳児の定員 	<ul style="list-style-type: none"> ・0歳児のクラス編成についての考え方 ・0歳児クラスでの担当制について ・0歳児保育における保育者と子どもの関係づくりで大事にしていること
クラス担任	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの構成（子どもと保育者） ・保育室の面積と間取り図（設備・備品・環境構成） ・保育の目標・方針 ・指導計画の種類 ・デイリープログラム 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育体制について ・保育環境について ・保育者間の連携について ・保育者と子どもの関係づくりにおいて大事にしていること ・保護者との連携のために大事にしていることと具体的な取りくみ

5. 倫理的配慮

面接調査の目的、方法（録音を含む）、倫理的配慮（①調査項目が保育園関係者のプライバシーの保護や守秘義務に反すると判断されたときには、回答を拒否していただく。②調査への回答

は、研究以外の目的には使用せず、研究の公表にあたっては、保育園や個人が特定されないようにする。)を文書にて説明し、調査への回答を研究資料として使用することに文書での同意を得た。

結 果

1. A保育園

(1) 0歳児保育の概要

産休明け保育を実施している。0歳児の定員は12人で実員も12人(4月生まれから12月生まれまで)である。1つのクラスで保育をしており、担任は5人である。現在、1人は午前中4時間の勤務である。また、育児短時間勤務の保育士が1人いるため、保育士がもう1人、夕方3時間、クラスに入る。

クラスの保育の目標・方針の1つに、「大人が丁寧に接する中で、信頼関係を築き、他の大人や友達と関わり合いをもてるようにする」があげられている。

(2) 園長の回答

①0歳児のクラス編成についての考え方

0歳児12人を5人の保育士で保育している。定員が増えたときからこの編成になり、今に至っている。12人の0歳児を1つの部屋で保育する状況においては、月齢の幅があったり入る子たちの事情が違うので、4人で対応するより1人ゆとりがあった方がより良い保育ができるのではないかと考えている。

②0歳児クラスでの担当制について

園として担当制を取り入れると決めているわけではない。子どもたちの様子を見て、子どもたちに合わせながら、「ゆるやかな担当制」という感じでこまめに対応して行こうと考えている。まずは子どもが安心できる、安定して過ごせる姿を見て、この大人がいいのだと気づいて関係づくりをしていく、そのようなゆるやかな担当制にしている。

③0歳児保育における保育者と子どもの関係づくりで大事にしていること

0歳児は保育園生活の始まりなので、保育士と子ども、保育士と保護者の関係を少しでも安定して、安心して過ごせるものにすることが第一と思っている。保育をめぐる環境が変わり、保育のやり方も変わってきているが、大人と子どもの信頼関係が大事であることは変わらない。

0歳児だけではなく、同じ景色でも年齢によって見方、感じる気持ちは違うということ、子どもが今何を感じているのかということを保育士にも保護者にも知ってほしい。0歳児は言葉でなくても通じるものがある。顔をじっと見るし、あやせば笑う。担任でなくとも、1回楽しく遊んだことを次に行くときちゃんと覚えていたりする。0歳児のそういうところに保育者も保護者も気づいてほしいと思っている。

(3) 担任の回答

①保育体制について

12人の0歳児を高月齢児（おすわりができる子以上）7人と低月齢児（あおむけで過ごす子たち）5人のグループに分けた。各グループをそれぞれ2人の保育士が担当し、もう1人の保育士（午前4時間のパート）が流動的にどちらにも入ることにしてスタートした。保育を進めていく中で、この保育士だと安心して泣き止む、寝かしつけがスムーズだったという姿があって、グループの中でなんとなく担当が固定していった。6月くらいからグループの担当を1人ずつ入れ替えた。

パート保育士の勤務時間は8時15分から12時15分までの4時間である。他に育児短時間勤務を補うために、15時から18時までの保育士がいる。毎日同じ人が入るので、子どもたちが落ち着くのも早かった気がする。夕方、担任が抜けてもその保育士がいてくれるので、子どもたちは安心して過ごせる。さらにもう1人、12時30分から15時30分まで0歳児クラスに入り、その後延長保育まで0歳児と1歳児クラスを行き来する保育士がいる。毎日昼に来てくれるので、特に春は助かった。

4月から現在までの保育体制で良かった点は、パートの保育士を含め、連携がとれていることである。課題としては、一方のグループを担当している保育士が他方のグループに代替で入り世話をする場合、一人ひとりの癖のようなものが、普段担当している保育士のようにはわからないことである。

②保育環境について

環境づくりで良かった点は、2つのグループそれぞれに対して遊びと生活を保障するために、色違いの可動式の畳を置いてスペースを分けたことである。ただし、安全な仕切りなど、空間を分ける工夫がなお課題である。

③保育者間の連携について

「〇〇ちゃん～なんだね」という他の保育士の何気ない一声一声を記憶に残すことが、一人ひとりの子どもも理解につながる。泣いている理由や好きな歌が共有できるし、夕方お母さんたちにその日あったことを伝えることもできる。自分が直接関わっていない他のグループの子についても知ることができる。

一人ひとりの要求に応えるという点では、子どもが求める保育士が対応できるようにしている。その日、リーダーでお話を読まなければならないが、この子を寝かせた方がよいというときには代わって絵本読んでもらうなど、職員間で連携をとってきた。また、例えば泣く姿が4月5月続いていた子に長期的にこの保育士がついた方がよいというときには担任間で体制を整えたり、話し合いながらなるべくその子に合った対応をとってきた。

④保育者と子どもの関係づくりにおいて大事にしていること

最初、担当制を計画していたが、保育を進めていく中で変わっていく子どもの姿になるべく臨機応変に対応するようにした。

慣れにくい子がいて、1日ついていっていると保育者に疲れが出るくらいパワフルに泣く。1人では大変なので2人を担当と決めた。午前のパートの保育士にもついてもらう計画を立てた。し

かしある時、担当でない人に変わったりと泣き止んだ。この子にはいろいろな人がついた方が気分が変わるのかもしれないとやり方を変えた。進めていくうちに若い保育士と楽しく遊ぶようになったので、ついてもらうことにした。その保育士だにご飯も食べられるし眠れることがやっていくうちにわかった。それから「決めすぎないやり方」をとることにした。

自分が泣かれたのに他の保育士だとピタッと泣き止んだら、少し悲しいが、「お互いのためにいいんだよね」と声に出すと、保育者は落ち込まない。対応が難しいときは「ごめん、代わってくれる」とも頼めるようになる。

⑤保護者との連携のために大事にしていることと具体的な取りくみ

お母さんたちの思いをなるべく汲みとりながら会話したり、子どもの姿を伝えて日々の成長を分かち合うよう心がけている。入園式の日、クラスで少人数に分かれて話をする際、予め決めた担当保育士が入り、話しやすい保育者をつくるようにした。ただし、保護者には担当の保育士だとは伝えていない。それは、実際保育していく中で担当が変わることもあるからである。5月の懇談会時は、最初全体で話した後、2グループに分かれて少人数で話し合った。少人数だと話が弾み、聞きたいことが聞けたようである。

2. B保育園

(1) 0歳児保育の概要

入園可能年齢は生後2ヵ月である。0歳児の定員は12人で、最大15人まで受け入れが可能である。実員は15人で、低月齢児6人（9月生まれから2月生まれまで）を1クラス、高月齢児9人（4月生まれから7月生まれまで）を1クラスとして、2クラスに分けて保育している。低月齢クラスの担任は2人、高月齢クラスの担任は3人である。

両クラスとも、保育の目標・方針に、「大人との情動交流を喜べる子ども（あやされたり、触れ合ったり、見つめることを喜び楽しめる子ども）」があげられている。

(2) 園長の回答

①0歳児のクラス編成についての考え方

少人数が好ましい。安心して自分の要求が出せるし、保育者自身も子どもの要求が見える。本来なら子ども6人に保育者2人のクラスにしたいが、待機児童が多い中で、1クラスは9人になっている。

②0歳児クラスでの担当制について

6人を2人でみる場合、子どもの不安感が特に強くなければ、2人の保育者が同じようにみる方が担当制にして担当していない子どもの姿が見えないよりはよい。ただ、不安の強い子どももいる。また、この子はこの保育者を求めていると見えても担任間では言えないこともあるので、園長が担当制を提案することもある。その子が安心した場合はその担当関係にとどまる必要はない（子ども自身が保育者を選ぶからである）。両方の保育者と楽しく関わった方が子どもはより自由である。

敏感な子どもは、子ども自身の要求の受けとめや気づきがよりできる保育者を求める。相性の問題ではない。その場合、その保育者は子どもが安定するまで中心的に関わりますが、子どもは

安心すればその保育者に固執することはない。

子どもが9人になると、どの大人に依拠すればよいのかが見えにくく、不安になると思う。そこで、食事のときには同じ保育者が担当するとか、ちょっと不安な子どもには特に関わりを求める保育者が担当するなど、ゆるやかな担当制は必要である。遊びの場面では、9対3で遊ぶよりは、子どもを6人と3人に分けて、6人が散歩に行っている間、3人をじっくり室内で1人の保育士がみると、子ども自身も大人のことが見えるし、友だちのことも見えやすい。

③0歳児保育における保育者と子どもの関係づくりで大事にしていること

0歳は特定の大人との関係が重要だと言われており、愛着をどうつくるかが大事である。そのため、子どもの欲求や要求、月齢が低ければ、快不快を保育者が汲みとって満たしながら愛着を築くことが求められる。生活の中でそういう満たされ方をするのが大事である。

遊びの場面も大事である。大人がわらべうたなどでいっぱい遊びかけて、もっとしてほしいという要求をもってもらう。「もう1回」とは言わないが、そういう表情をするので、「もう1回なの?」と言って、またやる。遊んであげて遊びたいという要求を育て、それを繰り返し遊ぶことが大事である。また、子どもが探索をしているような場面では、子どもの思いや要求がわかって見守ること、そして、ちょっと困っていたら満足できる方向で手伝うことが大事である。

担任がたいへんなときには、園長として具体的に援助する必要がある。0歳児保育では、睡眠が大仕事である。寝かせられないと保育者自身もつらくなるので、園長が応援に入る。園長と一緒に寝かせてそれを担任に見てもらう。このようにたいへんさを共有しながら、保育者が心から楽しいと思って子どもと関わることの大切さを伝えている。

保護者が保育者や保育園を信頼するのは、保育者が子どもを大切に思っていることを感じたときである。本当に大切に思っていて、日常のことでその子を大切にしているという思いで保護者に伝えていくことが大事である。

(3) 低月齢クラスの担任の回答

①保育体制について

6人の子ども（4月途中入所児を含めて）を2人で担任している。子どもは月齢差があり、低月齢の2人と比較的高月齢の4人の構成である。

最初、低月齢の2人のことをつかむのが難しかったので、飲むのも眠るのも同じ保育者が毎日関わった方が見えてくるのではと考え、1人の保育士が中心的に関わることを確認した。ただし、担当とはせず、そのときによってどちらの保育士も関わるようにした。今は、どちらの担任も気持ち良く寝たり飲んだりするやり方がわかって関わっている。7月1日現在は6人を2人でみるようになっている。

10時45分から12時まで、看護師が0歳児の2クラスを行き来しながら応援に入る。このクラスでは食事の介助も行う。それでも大人の手が足りないときには、園長も応援に入る。

4月から現在までの保育体制で良かった点として、園長や看護師が入ることで、6人一人ひとりのその時の欲求にしっかりと応えることを大事にできたこと、泣いたときにもその欲求を受けとめる保育ができてきたこと、一対一で関われる体制がとれたことがある。課題は、朝の保育体制である。人手の足りない時間帯で、ていねいに保育したいと思っているのに子どもの

要求に応えきれなかったり、低月齢の2人の授乳と睡眠をしっかり保障することが日中に比べて難しい。

②保育環境について

発達に合わせて遊びの環境づくりをしているが、高月齢と低月齢のどちらの子どもの活動も保障することが課題である。また、生活スペースと遊びスペースが混在しており、もう少し分けられた方が良い。

③保育者間の連携について

一人ひとりの子ども理解のために、日常の伝え合いを大事にしている。自分が関わってうまくいかなかったときや泣かせてしまったときには、もう一人の担任にその子に関わったときにどうだったかを聞くなど、担任同士でたくさん話をしながらそのことを一緒にとらえていくことができている。相手の関わりから学んだことを言葉にして確認することが大事だと思う。

一人ひとりの要求に応えるために、子どもの要求や欲求に気づいても自分が関われないときは、相手に伝えて、どちらかが関われるようにする。どちらも関われないときには園長に頼むこともある。このように、要求や欲求に気づいたら声に出し、自分が関われないときにはどうするかを考え合って対応することを大事にしてきた。

大人との一対一を保障するために、担任が対応できないときには他の職員も来てくれる。子どもにとって一対一で過ごす時間が大切な時間だということを全職員が共通理解できている。

④保育者と子どもの関係づくりにおいて大事にしていること

その時その時の欲求を探りながらぴたりくる関わりを日常的につくっていくことが基本にある。子どもが何を見ているのかと目を向けて、表情の変化から子どもの気づきを言葉にして共感したり、わらべうたで目を見て名前を呼んだり、何気ないこともしゃべりかけたりなどの関わりを大事にしている。

⑤保護者との連携のために大事にしていることと具体的な取りくみ

日々の伝え合いが一番の基本にある。子どもは小さければ小さいほど、前の晩のリズムで保育園でのリズムも変わってくるので、そこをていねいに聞き取りしたり、様子がいつもと違うときには帰りに話すようにしたりして、今、関係を作っている段階かと思う。懇談会で保護者同士が理解し合えるようになることを大事にしている。

(4) 高月齢クラスの担任の回答

①保育体制について

子ども9人に保育者3人のクラスである。グループ制はとっていない。食事場面ではゆるやかな担当制をとり、メンバーと保育者と場所を固定して、3対1で毎日同じ保育者と一緒に安心して食べられるようにしている。この保育者の方が落ち着いて食べられるとか、食べるペースが速い子と遅い子を一緒にするとたいへんだとか、子どもの様子を見て組み合わせを1回変えた。

10時45分から12時まで（ミルクの準備と食事前の準備から食後の片づけまで）、看護師が

0歳児の2クラスを行き来しながら応援に入る。高月齢のこのクラスではミルクの準備と食後の片づけを行う。

4月から現在までで良かった点は、担当制にしなくとも、子どもが安心する保育者が対応することを3人の保育者で伝え合い確認し合って進めてきたことである。課題は、朝の保育体制の厳しさである。0歳の2クラスとも8時30分の時点でほぼ全員の14人の子どもがそろい、それを3人で保育するので、見守るだけでせいっぱいであった。7月からパートの保育者が1人入ようになったので、8時30分から2クラスに分けられるようになった。

②保育環境について

遊びについては、年齢に応じた環境づくりができています。生活の場の環境づくりでは、食事をするところと遊ぶところをだいたい分けていた点が良かった。特に大きな課題はなく、午前寝の保障もしっかりできた。午前寝をしない子が同じ室内にいても寝る場所と遊ぶ場所に距離があることでどちらの活動も保障ができた。

③保育者間の連携について

一人ひとりの子ども理解のために、日常の中で子どもの姿をていねいに伝え合い、対応を考え合うことを大事にしている。3人で話す時間を確保することは難しいので、共有のノートを1冊つくり、子どもと関わって思ったことや子どもの姿を書くことにした。また、それぞれが思っていることを会議の時間内に全て話すことは無理なので、一人ひとりの姿をどうとらえているかを予め書いてきて見せ合うようにしている。困っていることがわかるので、園長も入り、関わりを考えていく。

一人ひとりの要求に応えるために、毎日ではないが少人数活動を取り入れる。体を動かして遊びたい子とゆったりと活動したい子で分けて活動するようにしている。3人で9人をみているとていねいに見きれないが、少人数だと保育者もゆったりと関わられるし、よりのていねいに子どもの姿をとらえられる。

④保育者と子どもの関係づくりにおいて大事にしていること

保育者が一緒に関わって遊ぶ中で一人ひとりの要求を引き出すことが大事だと思う。4月からわらべうた遊びを意識してやってきているが、「もう1回」という表情をするので、「もう1回なの？」と問いかけて繰り返すことで要求を引き出すことができる。

また、ていねいに日常の世話をする中で、大人への信頼感が育つようにしたい。信頼感とともに育ってきた安心感を土台にどんどん関わり合いの世界を広げていけるようにしたい。

⑤保護者との連携のために大事にしていることと具体的な取りくみ

日々の伝え合いを大事にしている。直接、子どもの姿を話したり、連絡ノートに書いたりする。困っていることを書いてきたときには、直接会って聞いたり保育園の様子を伝えたりしている。懇談会では園長に発達の話をしてもらったり、保護者同士が悩みを出し合いながら共感し合えるようにしている。栄養士や看護師ともつながりあって母親が安心して子育てできるようにしている。

考 察

1. 集団の大きさ及び子どもと保育者の人数比

A保育園の場合、1クラスの子どもの人数は12人であるが、発達の時期を考慮して7人と5人の2つのグループに分けて保育している。一方、B保育園は、1クラス6人ずつの2クラス編成を本来のあり方としている。現在、待機児童対策として高月齢の1クラスは9人となっているが、活動によって3人と6人に分けたり、3人ずつに分けたりしている。両園とも少人数での生活や遊びを大事にしていると言えよう。その理由として、B保育園の園長は、少人数の方が子どもは要求を出しやすく、保育者も子どもの要求をとらえやすいことをあげている。確かに、少人数の場面の方が、子どもは要求表現の相手を見つけやすく、保育者は子どもの要求の表現やサインに気づきやすいであろう。保育者と子どもの信頼関係は、保育者が子どもの要求を汲みとり、満たしていくなかで築かれていく。そのためには、少人数のクラス編成やグループに分けての保育が重要になると考えられる。

子どもと保育者の人数比を見ると、常勤の保育者の配置は両園とも3対1である。しかし、A保育園では、午前中もう1人の保育士が担任として入り、その保育士が抜けた後も別の保育士が少なくとも3時間は入る。園長の回答からは、12人の子どもを1クラスで保育するにあたり、余裕のある体制をとることでよりよい保育をしようとしていることがわかる。B保育園の場合は、食事の前後に看護師が2クラスを行き来しながら応援に入る。また、園長が随時応援に入る。低月齢クラスの担任は、こうした応援が入ることで、その時々の子どもの要求に答え、一対一で関わる体制がとれたと言う。一方、14対3で保育する朝の時間帯には、子どもの要求に答えきれないことがあったと言う。以上のことから、子どもにいていねいに関わり、子どもの要求に応じていくためには、3対1の基準を超える保育者の配置が必要であることがわかる。また、どの時間帯にもそれを保障できる保育制度が求められることを示している。

2. 一人ひとりの子どもが安心して過ごせる保育体制

A保育園の場合、5人ないし7人の子どもをそれぞれ2人の保育士でみる体制がとられるが、保育を進めていくうちに、グループの中で担当が固定していったと言う。子どもの姿を見ながら、より安心できる保育士が担当するようになったというのである。保育者と子どもの関係づくりで大事にしたいことを尋ねた際にも、誰が関わるかを決め過ぎず臨機応変に対応することと回答している。

B保育園の低年齢クラスでは、6人の子どもを2人で保育する一方、子どもが9人の高月齢児クラスでは、一部、担当制を敷いている。9人の場合、どの大人に依拠すればよいのかをわかりやすくし、安心できるようにする必要が生じると考えているからである。このように、担当制の意味はクラス集団の大きさによっても異なる。また、園長の回答からも察せられるように、時間の経過とともに変化する。不安の強い子どもに担当制をとったとしても、その子どもが安心すれば、子ども自身が保育者を選んでいくので、その関係にとどまる必要はないと言う。

以上のことから、子どもが依拠する大人を見つけ、安心して過ごせるように保育体制がとられるが、それは固定的なものではなく、子どもの姿に応じて組み換えられていくこと、保育者が関わる子どもを決めることよりも、子どもが保育者を選ぶことが優先されていることがわかる。このように、子どもの姿に応じて柔軟に保育体制を調整していくことが、子どもにとって

安心のよりどころとなる保育者との関係を築いていく上で重要になると考えられる。

3. 保育者間の連携

A保育園の場合、子どもに関わりながら発する同僚の言葉を聞き合うことが一人ひとりの子ども理解につながっていたと言う。B保育園の低月齢クラスでは、うまくいかなかった関わりも含めて、日々の伝え合いを大事にし、共通理解を図っている。また、高月齢クラスでは、3人の担任で子どもの姿を伝え合い、対応を考え合うために、書いたものを活用している。これらのことから、一人ひとりの子ども理解のためには、子どもの姿や関わりを伝え合うとともに、その意味や対応を考え合うことが重要であると考えられる。

一人ひとりの要求に応えるために、A保育園では、子どもが求める保育士が対応できるよう連携をとっている。B保育園の低月齢クラスでは、子どもの要求に気づいたら自分が関われないときでも声をかけ合って誰かが対応できるようにしている。また、高月齢クラスでは子どもの要求に合わせて少人数活動を取り入れている。このように一人ひとりの要求に応えることは、必ずしも一対一でなされるわけではないが、重なる部分も多い。B保育園の低月齢クラスの回答からは、一対一を保障するために、担任以外の保育者も協力する態勢が園全体にあることがわかる。クラス内の連携とともに、クラスを超えた連携によって一人ひとりの子どもの要求に応えることで、特定の保育者あるいは大人への信頼感を育んでいるものと考えられる。このように、一人ひとりの子どもを理解し、要求に応える上で、職員間の連携は欠かせないものである。

4. 保育者と子どもの関係づくりで大事にしたいこと

0歳児保育における保育者と子どもの関係づくりで大事にしたいこととして、A保育園の園長は信頼関係をあげ、B保育園の園長は愛着をあげている。どちらも子どもにとって安心のよりどころとなる関係づくりをめざしていると言えよう。

そのためにB保育園の園長は生活の中で子どもの要求を満たしていくことと、遊びながら遊びの要求を育てて繰り返し遊ぶことをあげている。また、低月齢クラスの担任は、言葉にされない子どもの欲求や気づきを探りながら応えたり働きかけたりすることをあげ、高月齢クラスの担任は、ていねいに世話をすることで信頼感を育てることや一緒に遊ぶ中で要求を引き出すことをあげている。要求を汲みとったり、引き出したりするための保育者の行動は子どもの発達によっても異なるが、生活場面での子どもの要求を理解し満たすことと、保育者自身が遊びながら子どもの遊びの要求を引き出し、繰り返し楽しむことが、保育者と子どもの関係づくりにおいては大事であると考えられる。

A保育園の園長は、0歳児は言葉でなくとも通じるものがあることを保育者に気づいてほしいと言う。また、B保育園の園長は、保育者が心から楽しいと思って子どもと関わることの大切さを担任に伝えている。これらの回答は、0歳児と気持ちをやりとりするプロセスが、0歳児と保育者の関係づくりにおいて大事であることを示していると言えよう。

今後の課題

A保育園では、1つの保育室で2つのグループに分けた保育を行っており、安全に空間を仕

切る工夫が課題となっている。このように、空間の条件は広さだけではない。保育室が別であれば、視覚的に遮断されるだけでなく、互いの音も聞こえにくいであろう。こうした環境の条件が保育者と子どもとの関係づくりにどのような影響を及ぼすかについて検討することは、今後の課題としたい。

また、保護者との連携が保育者と子どもの関係づくりにどのような影響を及ぼすかについての検討も今後の課題である。B保育園の低月齢クラスの担任が述べているように、家庭での生活リズムをていねいに聞き取ることは、保育園での子どもの姿を理解し、生活をつくっていくために大切である。より多くの資料を収集し、考察していきたいと考える。

文 献

- 今井和子（2006）担当制保育で乳児保育の質の高い実践を。榊原洋一・今井和子 編著，今求められる質の高い乳児保育の実践と子育て，ミネルヴァ書房，158-164
- 大沢佳代（1994）大人とのかかわりを大切に～0歳児のグループ担当制～。季刊保育問題研究，145，新読書社，68-72
- 大宮勇雄（2006）保育の質を高める，ひとなる書房
- 神田英雄（2006）乳児期の発達と保育の課題。宍戸健夫・土方弘子・神田英雄 編著，新版 乳児の保育を豊かに，ルック，21-54
- 橘田美千代・佐藤有美子（2006）こどもも保育士も心地よく一日を過ごすークラス体制のあり方をめぐって。現代と保育，65，ひとなる書房，18-30
- 倉繁恵里奈（2005）ピタッとくる瞬間を大切に～0歳児保育を通して感じたこと～。季刊保育問題研究，212，新読書社，66-69
- 厚生労働省（2008）保育所保育指針<平成20年告示>，フレーベル館
- 佐藤有美子（2009）乳児期に一人ひとりが安心して心地よく一日を過ごせるように。神田英雄・村山祐一 編著，保育とは何かーその理論と実践，新日本出版社，162-174
- 汐見稔幸・小西行郎・榊原洋一 編著（2007）乳児保育の基本，フレーベル館
- 高木麻衣・萩原喜久代（2012）子どもも親も安心できる場に～新入園、途中入園に当たって。季刊保育問題研究，254，新読書社，48-51
- 坪田のりこ（2012）0歳児保育の環境づくり～一人ひとりの思いを大切に作る保育をめざして。季刊保育問題研究，254，新読書社，52-55
- 日本子ども学会 編，菅原ますみ・松本聡子 訳（2009）保育の質と子どもの発達 アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡調査から，赤ちゃんとママ社